

備陽史探訪の会主催
四国高知と南予を巡る旅
平成28年5月28日・29日実施



復元された大洲城天守閣

講師 田口 義之 会長

 **備陽史探訪の会**

スケジュール

5月28日（土曜日）

◎7：00 福山駅北口発

↓（瀬戸大橋経由）

○9：45 岡豊城址（高知県立歴史民俗資料館）→本文P1～6

↓

○11：30 高知城見学（昼食）→本文P6

13：00 同上発

↓

○15：00 中村御所跡（一条神社）→本文P8～10

↓

○17：15 足摺岬（みさきホテルに宿泊）

5月29日（日曜日）

◎8：30 足摺岬発

↓

○11：10 宇和島城跡→本文P11

↓

○12：20 宇和島市内（昼食）

↓

13：00 同上発

↓

○13：45 大洲城見学→本文P13

↓

○15：10 内子（内子座・町並）

↓（しまなみ海道経由）

◎19：00 福山駅北口着・解散

注意事項

- 1、団体行動ですので、勝手な行動を取らないでください。
- 2、スタッフの指示に従ってください。
- 3、ごみは各自で持ち帰ってください。
- 4、緊急の場合は下記に連絡してください

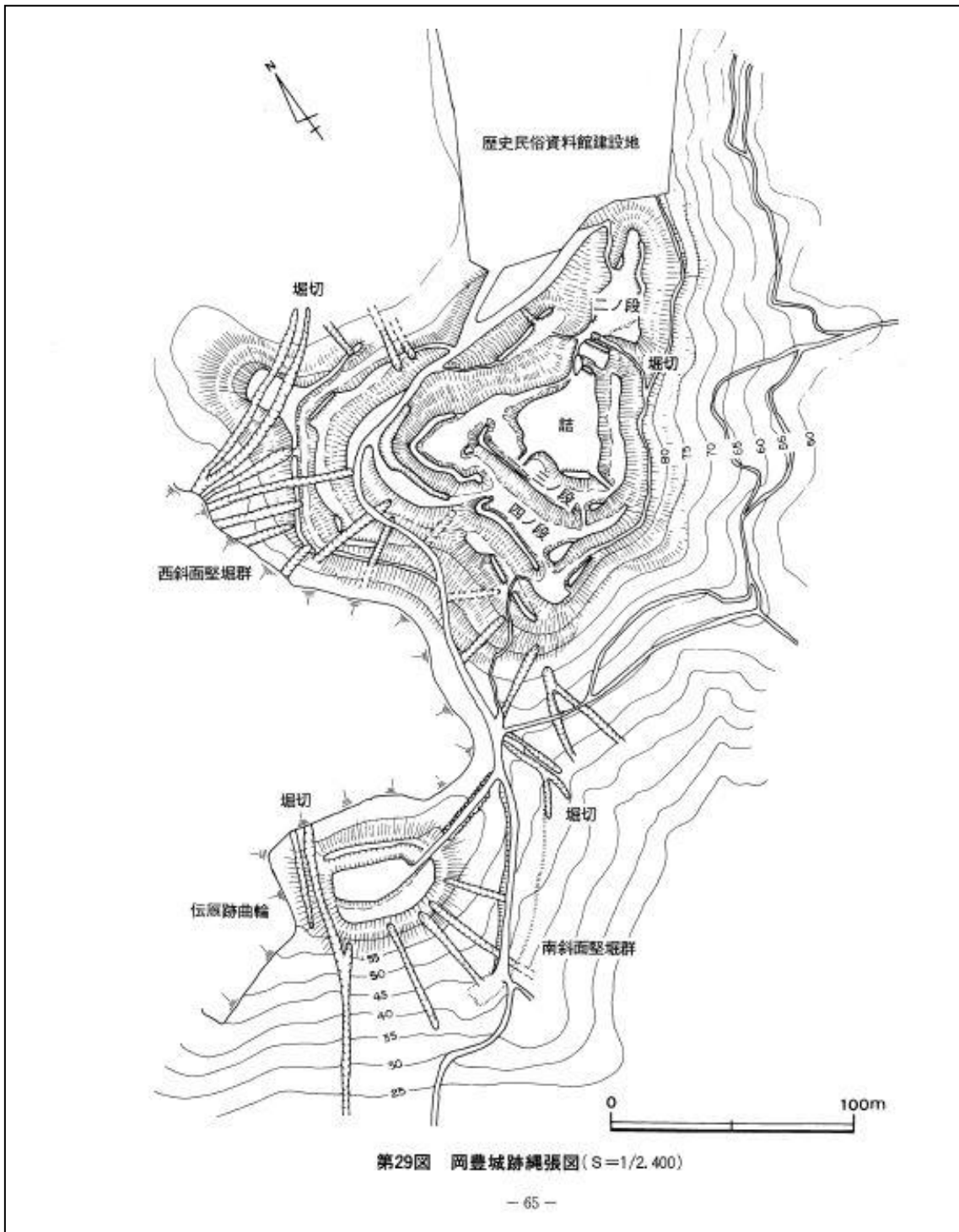
CONFIDENTIAL

（会長携帯）

CONFIDENTIAL

（漆川携帯）

岡豊城跡（南国市岡豊町）



県道北本町領石線の学校分岐バス停から南の岡豊山にのぼると、四国制覇をなしとげた戦国大名長宗我部元親の居城岡豊城跡（県史跡）に至る。平安時代末期から鎌倉時代初期に、信濃（現、長野県）から土佐の長岡郡邪宗我部郷（現、南国市）にはいった秦能俊の

子孫が、長宗我部氏を名乗り、やがて西方の岡豊山に城を構えた。11代目の信能以降北朝方に属し、細川氏の庇護の下、夢窓疎石のたてた五台山汲江庵（現、高知市五台山）の寺奉行となるなど活躍した。しかし応仁の乱（1467～77年）後、細川氏一族の内紛のため、その援助をうけることができなくなる。19代兼序は1508（永正5）年（1509年説もある）、本山・山田・吉良・大平氏などの豪族に攻められ、自刃し城もおちた。

兼序の子国親は、中村（現、四万十市）の一条氏をたより、一条家の下で成長した。国親は1518年に岡豊に帰り、長宗我部家の再興に乗り出す。四散した家臣を集め、周辺の土豪を討って領地を広げたが、1560（永禄3）年、本山氏の拠点浦戸城（現、高知市浦戸）を

攻略中に病死した。国親のあとをついだ元親は、本山氏を討つため1563年、長岡郡本山に兵を進めた。このとき安芸国虎の軍が岡豊城へ押し寄せ、長宗我部方は危機におちいったが、岡豊八幡宮の白羽の矢が、雷のおちるような音をたててとび、安芸の軍勢を悩ませたという伝説がある。

安芸軍の退却、本山氏打倒によって土佐の中央部を手中におさめた元親は、1569年安芸氏を滅ぼし、弟の親貞に吉良氏を、3男親忠には津野氏をつがせ、吾川・高岡郡の所領をあわせ、1574（天正2）年には一条氏の支配していた幡多郡をも制覇した。1585年四国を制圧したが、やがて豊臣秀吉に敗れ、土佐1国のみを安堵された。

岡豊城築城の時期はあきらかではないが、その規模は土佐屈指の中世山城である。主郭部と南下方の家老屋敷とよばれる曲輪、それに厩床（伝厩跡曲輪）とよばれる西方の曲輪の副郭部からなる連立式山城である。

詰ノ段を中心とする主郭部は、詰の平坦面を中心に細長い二ノ段を構え、西下には三ノ段・四ノ段とよばれる南北に細長い曲輪を配する。三ノ段・四ノ段は土塁の保存もきわめてよい。北西部の2つの尾根には、攻撃を防ぐために3条の堀切を構える。

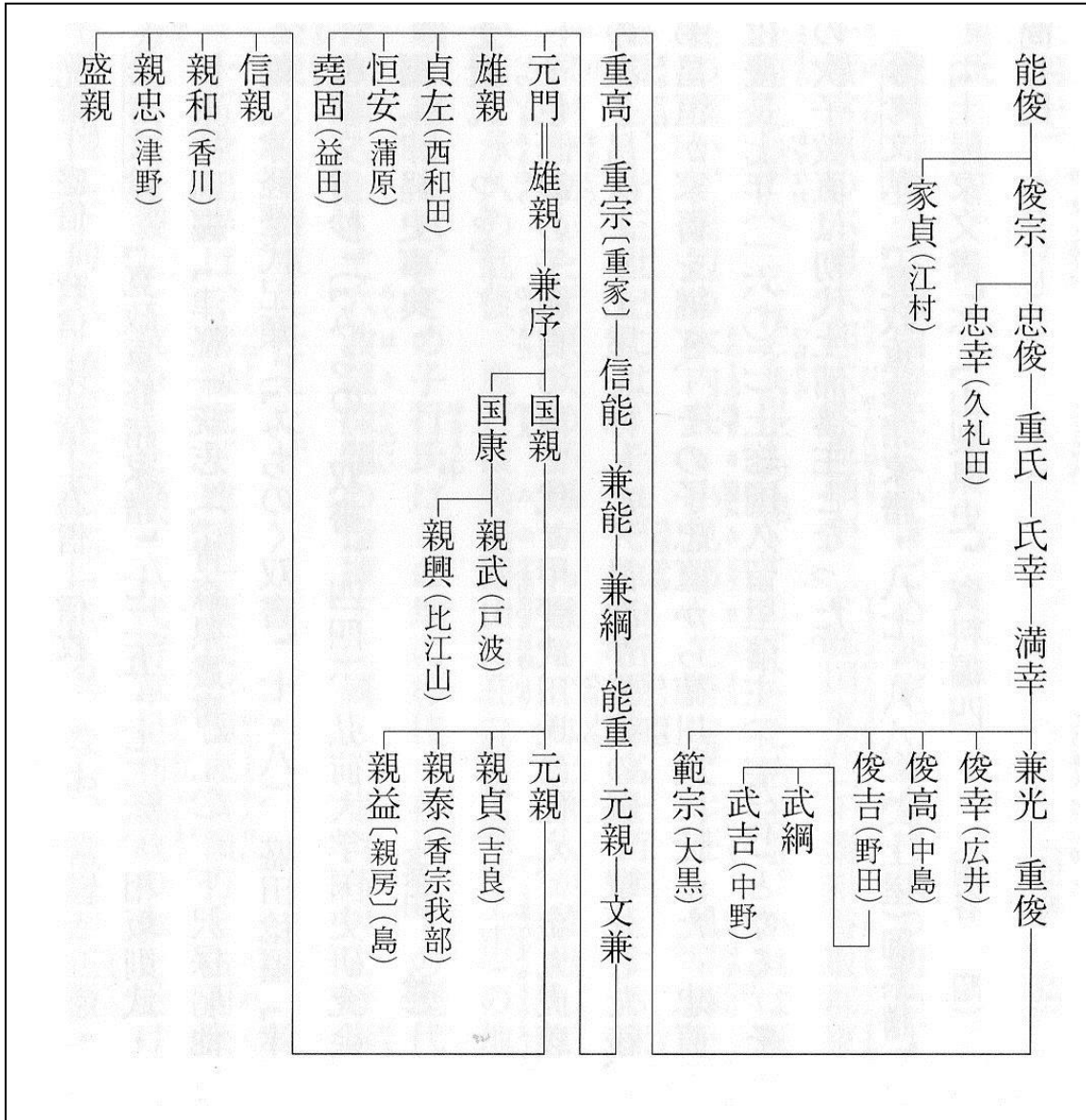
副郭部のうち、厩床は本城に対する出丸で前線拠点とされる。この曲輪は、西斜面に深い2重の空堀を構え、守りを堅固にしている。

城跡内に高知県立歴史民俗資料館がある。高知県における拠点的な歴史系博物館で、総合展示室には原始から近現代に至る土佐の歴史が、民俗展示室には鍛冶・海・山・野の4テーマで、人びとの生活文化が展示されている。また屋外展示として、土佐の山村民家味元家住宅（国登録）が移築され、資料館建設のために行われた発掘調査で確認された礎石建物跡・石敷遺構・土塁・石積みの遺構なども、整備・復元されている。

長宗我部氏

中世、土佐国の豪族、戦国大名。長曾我部とも書く。中国、秦の始皇帝の後裔、秦河勝の子孫と伝えるが、蘇我氏部民の子孫説もある。鎌倉時代初めごろ土佐国長岡郡宗部郷（高知県南国市）に移り、子孫は地名をとって長宗我部氏を称し、東に隣接する香宗我部氏と区別したと伝える。鳩酢草を家紋とし、地頭として発展した。七代兼光のころ多くの庶流

を派生したが、のちに一門として長宗我部氏の居城岡豊城（南国市）の周辺にあって、藩



屏を形成する。十一代信能は足利尊氏に属し、長岡郡介良荘内の違乱をしずめたが、十二代兼能以後も北朝方として活動し、細川氏が土佐国守護代として入国してからは、その下において吸江庵（高知市）の寺奉行となった。文明三年（一四七一）ごろ、十七代元門は主親の命令にそむいたため追放され、弟雄親があとをついだ。名主たち土豪を傘下におさめ、次第に発展した。しかし細川氏の衰退により、永正五年（一五〇八、六年ともいう）十九代兼序は本山・山田・吉良・大平の連合軍の攻撃をうけ、岡豊城は落城し、兼序は自刃した。子国親は幡多郡中村（中村市）の一条氏を頼り、ここで成長した。同十五年岡豊城に帰り、勢力を回復した。子元親は天正三年（一五七五）土佐国を統一し、同十三年四国を制覇したが、同年豊臣秀吉に降伏した。慶長五年、関ヶ原の戦いで元親の子盛親は西軍に属して敗れ、領国を没収されて滅亡した。広井・中島・野田・大黒・馬場・比江山をは

じめ、多くの庶流が派生し、吉良・香宗我部・津野の諸氏も縁組により一族となった。

長宗我部国親（一五〇四―一六〇）

土佐国の大名。元親の父。幼名千雄丸（千王丸・千翁丸とも伝う）、信濃守、瑞応覚世。永正元年（一五〇四、文亀二年（一五〇二）説もある）土佐国長岡郡岡豊城（高知県南国市）に生まる。父は長宗我部兼序。永正五年（六年説もある）本山・山田・吉良・大平の周辺諸豪族の攻撃で岡豊城が落城し兼序が敗死した時、家臣に伴われて城を脱出、幡多郡中村の一条房家を頼り、房家のもとで成長、長宗我部家復興を志した。同十五年房家の斡旋で岡豊城に帰って所領を回復し、東南の吉田城主の吉田周孝に妹を嫁がせてこれと結び、女を本山茂辰に配して勢力を伸張した。天文十六年（一五四七）ころ南接する長岡郡大津城主の天竺氏を討ち、つづいて横山・下田・池・十市・蚊居田ら長岡郡南部の諸豪族を支配下に入れ、同十八年ころ東に転じて山田氏を打倒し、同二十三年には父兼序追福のため岡豊城東麓に兼序寺を建立した。

国親は仏教を崇敬し天文末年には入道して瑞応覚世と号したが、永禄元年（一五五八）には長男元親とともに国分寺金堂を再建した。弘治年間（一五五五―一五八）の初め香美郡葦生に兵を出して土豪の動きを封じ、弘治二年には本山氏に属する秦泉寺・大高坂・国沢ら土佐郡の豪族を討ち、同年五台山竹林寺と吸江庵の争論を斡旋解決した。永禄元年ころ三男親泰に東に隣る香宗我部家をつがせて香宗我部氏の所領を勢力圏内に入れた。同三年大津より種崎へ兵糧を運ぶ船が本山氏に襲われたことを理由に本山氏支城の長浜城攻略を計画し、謀略によって五月二十六日奇襲し、これを占拠した。ついで本山氏の主力と長浜戸の本に戦って勝利をおさめ、浦戸城に入った籠城軍を攻撃して敗走させた。しかし六月に入って急病となり永禄三年六月十五日岡豊城で没した。時に五十七歳（五十九歳ともいう）。岡豊城北の北谷に葬られた。

長宗我部元親（一五三八―一九九）

土佐国の大名、幼名弥三郎、のち宮内少輔、羽柴土佐侍従。長宗我部国親の長男として天文七年（一五三八）長岡郡岡豊城（高知県南国市）に生まる。幼少時は姫和子といわれた柔和な性格で国親は心痛していたという。永禄三年（一五六〇）五月長浜戸の本の戦で父国親に従って初陣し戦功をたて土佐の出来人といわれるようになった。同年六月国親の死後家督をつぐ。以後弟親貞・親泰をはじめ重臣久武内蔵助らの協力で本山・吉良・安芸・津野らの諸豪族を従え、天正二年（一五七四）家臣に追放された一条兼定の所領の幡多郡を手中におさめ、兼定の子内政を長岡郡大津城に移して娘を配し、同三年安芸郡東部の土豪を打倒して土佐を統一した。弟島弥九郎親益が謀殺されたことを理由に天正三年末ころ阿波に出兵し、同四年には南伊予、同六年には讃岐へ侵攻した。その後同九年ころまでに阿波の三好、伊予の西園寺・宇都宮、讃岐の香川・羽床らの諸氏を降した。その間天正六

年には次男親和に香川家をつがせ、同九年には一条内政を伊予へ追放して土佐一条家を滅ぼした。

天正十年織田信長と対決することとなったが本能寺の変で危機を脱し、大兵を阿波に入れて十河（三好）存保を中富川に破り、勝瑞城を攻略して阿波を制圧した。つづいて東讃岐へ侵攻して十河城を囲み、同十二年これを陥れて讃岐を統一し、同十三年春には伊予湯築城主の河野通直を降して四国を制覇した。賤ヶ岳の戦いで柴田勝家と、小牧・長久手の戦いでは織田信雄・徳川家康と結び、豊臣秀吉を挟撃しようとしたため、同十三年六月から七月にかけて秀吉の四国攻めにあい、降伏して土佐一国の領有を許された。同十四年秀吉の命で長男信親と九州に出兵し、島津勢と豊後の戸次川に戦って敗れ信親は戦死した。同十五年九月より検地を始め、同十六年岡豊より大高坂（高知市）に居城を移し、後嗣を四男盛親と定め、反対した一族の吉良親実・比江山親興に切腹を命じた。同十八年秀吉の小田原攻めに従軍し、帰国後浦戸城（高知市）に移った。文禄の役に従軍して従四位下少将となる。慶長元年（一五九六）サン・フェリペ号漂着の処理を行い、同二年三月掟書を定め、慶長の役に出兵し同三年三月帰国した。同四年三月三男津野親忠を香美郡岩村に幽閉し、四月上洛したが同年五月十九日伏見で没した。六十二歳。法号を雪蹊恕三大禅定門といい、吾川郡長浜村（高知市長浜）天甫寺山に葬る（墓は県史跡）。

元親は軍事活動のみならず領国経営に手腕を発揮した。秀吉より土佐一国を安堵されてからは、公儀優先を考え、家臣団を再編して久武・桑名・中内の三氏を中心に家老たち重臣と馬廻クラスに施政方針を徹底させ、月六度の会議により諸政策を定め、中部五郡と安芸・幡多の東西二郡にそれぞれ諸奉行を任命し、山間部や郷分・浦分の下級役人を監督させた。また在地の農民的武士である一領具足をそれぞれの地域の衆として組織し、軍事や労役に従事させた。城下町経営にも熱心で商工人を中心とする市町を岡豊・大高坂・浦戸などにつくったが居城移転や除封で未完成に終わった。軍事・経済上の理由から山林資源を重視し竹木の伐採に規制を加えた。元親のこうした政策は『長宗我部地検帳』、掟書、『秦民政事記』などの史料によって知ることができる。元親は一面において文化人であった。仏教・儒学に関心をよせ、南学を奨励し、和歌・連歌・茶道にも心得があった。現存する国分寺金堂・土佐神社・豊楽寺薬師堂は元親の修復したものである。

長宗我部盛親（一五七五—一六一五）

土佐国の大名。幼名千熊丸、右衛門太郎（増田右衛門尉長盛を烏帽子親として右衛門、盛親を名乗る）、土佐守。天正三年（一五七五）岡豊城（高知県南国市）に生まる。長宗我部元親の四男、母は斎藤氏。同十四年長兄信親の戦死後、後嗣と決定。一族の吉良親実・比江山親興はこれに反対し元親より自刃を命ぜらる。慶長四年（一五九九）元親の死後家督をつぎ、長浜（高知市）の慶雲寺を長宗我部氏の菩提寺とし、元親の法号にちなみ雪蹊寺と改め、元親の画像（重要文化財）と木像（秦神社神体）を納む。豊臣秀吉の小田原攻めに元親とともに従軍し、文禄・慶長の役にも出兵した。慶長元年十一月には近習・中間・

小者の勤務について規定を定め、翌二年三月には元親と連名で掟書を発布した。

関ヶ原の戦では西軍に属し、毛利・吉川・長束・安国寺らの諸将とともに南宮山麓に陣したが、西軍の敗色が濃くなると戦わずに帰国した。帰国後浦戸城をかためて関東軍にそなえるとともに井伊直政を通じて徳川家康にわびた。しかし兄の津野親忠を殺したため家康の怒りにふれたので上京して弁明したが許されず、領国を没収された。上洛後上立売の柳ガ厨子に閉居し、大岩祐夢と号し寺子屋の師匠をして十四年を過ごした。慶長十九年大坂冬の陣には豊臣秀頼の招きに応じ大坂へ入城した。翌元和元年（一六一五）の夏の陣では八尾方面に出陣し、藤堂高虎の兵と戦ったが、井伊直孝の軍に側面をつかれて敗走した。大坂落城後京街道を北に逃れ、山城の八幡付近の橋本に潜んでいるところを蜂須賀の家臣に捕えられ、京の大路を引き廻された末、五月十五日板倉勝重に六条河原で斬られた。四十一歳。法号は源翁宗本。京都五条寺町の蓮光寺に葬る。

高知城跡（高知市丸の内）→日本100名城（84番）



高知城は関ヶ原の戦い（1600年）後、遠州掛川（現、静岡県掛川市）から土佐に入国した山内一豊が築いた城である。もともこの地は大高坂山とよばれる山で、南北朝時代に南朝方として活躍した大高坂松王丸の居城があった。安土・桃山時代には、長宗我部元親が長岡郡岡豊（現、南国市岡豊）からこの地に居城を移したが、潮江川（鏡川）や江の口

川の水害に苦勞し、わずか 3 年で海岸部の浦戸（現、高知市浦戸）に移った。ちなみに石垣の整備事業に伴う発掘調査により、現在の石垣の内側から長宗我部時代のものと考えられる石垣が発見されている。

山内一豊は、築城の総奉行に城普請の名手として名高い百々越前守を任命し、工事にあたせた。なお越前守の居宅のあった高知城の西には、現在も越前町の名が残る。越前守は城普請のおもな職人を上方から迎えるとともに、城周辺の老人や子どもまで日当を払って動員し、1日に約 1300 人もの人夫を使役した。また、石材は高知市北部の久万・万々、西部の朝倉、南部の神田・潮江などから、木材は久万・万々のほか、北部の秦泉寺・円行寺・一宮から伐りだした。築城工事は大がかりなものであり、最後に三ノ丸が完成するのは、一豊の没後 6 年を経た 1611（慶長 16）年、2代藩主忠義のときである。

築城中にもたびたび水害に見舞われたため、忠義は五台山竹林寺（真言宗）の空鏡上人と相談し、1610（慶長 15）年に、当初河中山であった当地の地名を改字して高智山とした。これが現在の「高知」の始まりである。

その後、1727（享保 12）年に、城下の大火が飛び火して追手門など一部の建物をのぞいて焼失。天守が再建されたのは 1749（寛延 2）年のことであった。1873（明治 6）年に高知公園として開放されたが、建物の多くは取りこわされ、現在では享保の大火に焼け残った追手門のほか、天守閣・本丸御殿・黒鉄門・東多聞・西多聞・廊下門・詰門など 15 棟が国の重要文化財に指定されている。

追手筋から城に向かうと、前面は巨大な石垣でふさがれている。ここが柵形で、敵をばみ石垣の上の狭間塀の 3 方から攻撃する仕組みである。追手門をぬけて左側、天守閣に向かう石段上り口脇に、自由民権運動の指導者板垣退助の銅像がある。

石段をのぼって最初の段が杉ノ段である。現在は花壇公園になっているが、かつてはスギが多かったところなので、この名称がある。ここには、夫のために名馬購入費用をだすなど内助の功で有名な一豊の妻見性院と名馬大田黒の銅像のほか、「秋風の ふくいのに妹をおきて 安芸の大山 越えかてぬかも」ときざまれた、幕末の国学者鹿持雅澄の愛妻の碑がある。

杉ノ段から三ノ丸に向かう途中には、深さ約 18m の井戸がある。毎日 3 回この水をくみあげ、藩主の住む二ノ丸まで運んだといわれる。三ノ丸の入口にあたる鉄門跡は、追手門と同じく柵形になっており、石落としや城壁に鉄串を並べた忍び返しなどの仕組みとともに、ここにも城防御の工夫がみられる。

三ノ丸は、新年などに家臣を集めて儀礼を行う大書院があった場所である。二ノ丸は藩主の居屋敷と奥御殿があったところで、南西側の下は梅林のある梅ノ段である。ここから本丸につづる通路は詰門の 2 階廊下で、本丸を警備する武士の詰所になっている。本丸の入口には廊下門があり、この上部に多聞櫓がたてられ、現在ではそのなかに、高知城をはじめ土佐の歴史を紹介するパネルなどが展示されている。西側には鉄板を打ちつけた黒鉄門がある。

本丸御殿（懐徳館）は大小 14 室からなり、藩の重要書類をいれておく納戸蔵がついている。高さ 18m の天守は一豊の旧領の掛川城に似せたといわれ、3 層 6 階で、小規模ながら入母屋破風・千鳥破風・唐破風などを取り入れており、優美な造りになっている。また鯨は珍しい青銅製である。最上階からは高知市街や周辺の山々を一望できる。なお、城の北西麓、城西公園の一角にある高知県立武道館の門は、藩校致道館の正門である。

現在、木造天守が残る城は、高知城を含め全国に 12 カ所しかなく、その意味でも貴重な文化遺産であるといえる。

中村御所跡（四万十市中村本町）

一条氏は鎌倉時代中期、摂関家である九条道家の 4 男実経が分家独立した事に始まり、その際この幡多郡にあった荘園を九条家より譲られた。

1467 年（応仁 1）応仁の乱が起こると、一条家の室町の第は焼失し、翌年一条教房とその一族は京都の戦乱を避けて、この地に逃れてきた。この時居館として中村御所は構築され、現在一条神社が建つ「森山」という小丘を背に三方を堀で囲まれた約 70 アールもの広さであったといわれ、また京を思わせる西小路や寺小路という地名が残り、後に土佐の小京都といわれる街造りの基盤となった。

明確な遺構は確認出来ないが、御所にあったという 7 つの井戸の中で唯一現存する「化粧井戸」や「咲かずの藤」といった一条氏ゆかりの旧跡が残されている。

土佐一条氏

土佐国幡多郡を拠点とした戦国大名で、五摂家の一条家が、応仁の乱を避けて中央から下向したことに始まる。土着後も土佐国にありながら高い官位を有し、戦国時代の間、土佐国の主要七国人（「土佐七雄」）の盟主的地位にあった。次第に武家化し伊予国への外征も積極的に行うが、伸長した長宗我部氏の勢いに吞まれ、断絶した。明治に入って一条家により土佐一条家の再興が行われ、一条家から分家して男爵が授けられている。

初代教房

土佐一条氏は、1468 年（応仁 2 年）に一条兼良の子で関白の一条教房が、応仁の乱の混乱を避け、京都から所領であった土佐幡多荘（現在の四万十市中村）に下向したことに起源を有する。鎌倉時代末期から室町時代にかけて敷地氏・布氏・入野氏などが幡多荘の押領をもくろみ、更に戦乱による所務不振に悩まされることになり、その安定化を図る目的もあったと考えられる。教房は幡多郡を中心とした国人領主たちの支持を得ることに成功し、文明年間には拠点として「中村館」を置き、以後「中村御所」と称された。また、教房とともに公家や武士、職人なども幡多荘に下向するなど、中村繁栄の基礎を築いた。

2代 房家

土佐で誕生した教房の次男一条房家は京都に戻らず幡多荘の在地領主となり、中村御所

を拠点に土佐の中村に京都さながらの街を築き上げ、官位も正二位まで昇進した。房家の



時代に土佐一条氏は管領細川氏（土佐守護を兼ねる）と土佐を二分する勢力となり、公家としての権威を維持したまま同国に勢力をもつ大名として存在感を高めた。嫡男房冬の子房基は伏見宮邦高親王の娘、側室には大内義興の娘を迎え、更に娘を伊予の西園寺公宣に嫁がせるなど、公武の有力者との婚姻を通じて土佐一条氏の安定を図っている。また、房家の次男一条房通は京都の一条家の婿養子となって関白に昇進している。

永正の錯乱（1507年（永正4年））により細川氏が中央に引き上げてその影響が消えると、土佐国は「土佐七雄」と呼ばれる七国人が割拠する状態となった。土佐一条氏はその上位に立ち、盟主的存在を担った。房家は、1508年（永正5年）に長宗我部兼序が本山氏により討たれた際、その遺児国親（元親の父）を保護し、再興を助けている。

3代 房冬

房冬以後は、公家よりも周辺の有力大名との婚姻を重視するようになり、房冬の子の房基は大友義鑑の娘を妻として生まれた娘を伊東義益に嫁がせ、房基の子の兼冬も最初は宇都宮豊綱の娘、続いて大友宗麟の娘を妻として近隣諸国との同盟関係の強化に努めている。房冬は、父の死からわずか2年後、後を追うように病没している。

4代 房基

房冬の子の房基の代では、1542年（天文11年）に謀反した津野基高を討ち、1546年（天

文 15 年) には津野氏を降伏させ、同じ頃に大平氏の本拠地の蓮池城を奪い、高岡郡一帯を

土佐七雄一覧 (『長元物語』より。1 貫 = 1~2 石)

土佐一条氏・土佐国司。七雄にとって盟主的存在。幡多郡 16,000 貫

本山氏・長岡郡 5,000 貫

吉良氏・吾川郡 5,000 貫

安芸氏・安芸郡 5,000 貫

津野氏・高岡郡 5,000 貫

香宗我部氏・香美郡 4,000 貫

大平氏・高岡郡 4,000 貫

長宗我部氏・長岡郡 3,000 貫

この他、『土佐物語』には山田氏、片岡氏を加えた 9 氏が有力豪族として記載されている。

一条氏の支配下に収めた。また、伊予国南部への進出を図るなど一条氏の勢威を拡大した。しかし、1549 年 (天文 18 年)、突如として自殺した (一説に暗殺)。

5 代 兼定

7 歳で家を継いだ房基の子の兼定は、治世の当初を除いて暗愚で遊興にふけたため信望を失い、他豪族を滅ぼして勢力を拡大しつつあった長宗我部氏 (当主 長宗我部元親) が幡多に侵攻してきたときに一条氏の家臣は先を争って元親の軍門に降り、兼定は九州豊後国に追放される。これについては、豊後の戦国大名大友氏らと組んで伊予に侵攻を繰り返すという、戦国大名化した土佐一条氏の政略が、摂関家である一条家の権威を失墜させることにつながったため、一条家の当主一条内基がこれを嫌って、介入した結果だという説もある。

1575 年 (天正 3 年)、兼定は婚戚大友宗麟の支援のもとに土佐に復権をはかって攻め込んだが、1575 年 (天正 3 年) の四万十川の戦いで長宗我部軍に敗れて没落した。のち兼定は伊予宇和島の戸島に隠棲した。もっとも、兼定はその後も伊予や土佐に残る親一条氏勢力との連携を図るなど、1585 年 (天正 13 年) の急死まで再起を図っていたという。

6 代 内政

兼定の隠居後に家督を継いだ子・内政は、長宗我部元親の保護の下、一条内基の推挙により左近衛中将に任じられ、これによって土佐一条家は再び昔日の権威を取り戻した。内政は大津城に入ったことから「大津御所」と称されたが、領地の中村から切り離されたうえ、元親の婿となり、実態は「長宗我部家の傀儡」となった。その後、長宗我部家の家臣波川玄蕃の謀叛に加担したという疑いをかけられ追放されてしまう。

7 代 政親

内政追放後、子・政親が家督を継ぎ、「久礼田御所」と称された (外祖父長宗我部元親の家臣久礼田定祐に養育されたことから)。戸次川合戦の後に摂津守に任官しているが、長宗我部氏滅亡後は京あるいは大和に退去したと言われ、その後の消息は不明である。土佐一

条氏はここに絶えることとなる。

国史跡宇和島城跡 宇和島市丸の内→日本100名城（83番）

宇和島城は、宇和島湾にのぞむ標高五〇位の丘陵を中心に築かれた平山城である。前身を丸串城といい、板島（宇和島の旧名）城・鶴島城とも呼ばれる。江戸時代を通じ、伊達氏一〇万石の居城であった。

築城の年代は定かでない。記録では、天正三年（一五七五）宇和西園寺氏の将、家藤監物に代わって西園寺宣久が「板島丸串城」に入ったとあるのが初見である。以後、小早川隆景、戸田勝隆の居城となったが、当時の城郭については明らかでない。



現在の城跡につながる本格的な近世城郭として改築したのは、文禄四年（一五九五）に板島へ入った藤堂高虎である。高虎は慶長元年（一五九六）八月から六か年の歳月を費して本格的な平山城の築造にあたり、天守閣を始めとして諸郭が完備することとなった。

城の平面は五角形をなし、西方と北方は海に面し、他の三面は海水を取り入れた堀で囲まれていた。山頂に天守閣を中心とする本丸、その下に二の丸、藤兵衛丸、長門丸、代右衛門丸、井戸丸、三の丸等の諸郭が配置された。

城主は藤堂高虎のあと富田信高が入り、元和元年（一六一五）伊達秀宗が入部し、以後九代続いた。なお、城は二代宗利の時代、寛文四年（一六六四）から八年間の歳月をかけ

て大改修をうけている。

国・重要文化財（建造物）

宇和島城天守一棟 昭和九年一月三〇日指定

宇和島城は、湾頭の丘陵に築かれた平山城で、慶長年間（一五九六～一六一四）に藤堂高虎によって築城せられ、寛文二年から五年（一六六二～六五）にかけて伊達宗利によって大改修されたものである。

天守は独立式の天守で三重三階、本瓦葺、白壁の総塗籠造である。高さ八〇尺ほどの丘陵を利用した土台方一三・八尺、高さ一四・五尺の建物で、正面の三階に唐破風、二階には、大型の千鳥破風を配している。

また、一階にはこれらのすべてを受けた大型の車寄せに唐破風が付せられ、式台がある。これらは各層の屋根とよく調和して、美しい姿と安定感をもち、江戸時代初期の貴重な天守閣となっている。

なお、昭和三五年から三八年にかけて解体修理が行われた。

また、宇和島城跡は昭和一二年に国指定の史跡となっている。

西園寺氏

伊予の西園寺氏は、京都の公家西園寺家の庶流で、室町時代から戦国時代にかけて伊予国南西部の宇和郡一带（愛媛県西予市周辺）を領有し、公家大名として勢力を持った。

宇和地方は鎌倉時代中期の西園寺公経のときに西園寺家によってほとんど横領に近い形で所領とされ、自己の荘園とした。鎌倉幕府滅亡から南北朝分立に至る動乱と西園寺本家断絶の混乱の中で、西園寺家庶流の西園寺公良が宇和郡に入り、在地の土豪を支配下に組み入れて有力国人領主として発展して行った。

戦国時代に入ると、伊予東部の河野氏や、土佐の一条氏、九州豊後の大友氏の侵攻に遭って次第に衰退していった。1584年（天正12年）、長宗我部元親の侵攻に遭って当主西園寺公広は長宗我部氏に下った。1585年（天正13年）、長宗我部氏が豊臣秀吉の四国侵攻で本国土佐を除く3国を没収されると公広は豊臣氏に降伏したが、宇和には新領主として戸田勝隆が封じられ、1587年（天正15年）公広が戸田勝隆に殺害されるに及んで伊予西園寺氏は滅亡した。ちなみに伊予西園寺氏に仕えていた土居清良が書いたとされる軍記物『清良記』（巻七「親民鑑月集」は日本最古の農書とされている）には同氏に関する記述がある。

藤堂高虎（一五五六～一六三〇）

伊勢国津藩主。幼名与吉、通称与右衛門。弘治二年（一五五六）生まれる。近江国犬上郡藤堂村（滋賀県犬上郡甲良町）の地侍藤堂源助虎高の次男。母は多賀良氏の女とら（妙育夫人）。元龜元年（一五七〇）浅井長政に属し姉川の戦に従軍、その後阿閉政家、磯野員昌、佐和山城主織田信澄と主を変えた。天正四年（一五七六）羽柴秀長に仕え、播州三木城攻め、但馬の一揆退治に功を挙げ、さらに伊勢峯および亀山城攻略、燥ヶ岳の戦、小牧

長久手の戦等々の戦功で同十三年一万石、同十五年九州攻めの軍功で佐渡守、はじめて紀州粉河二万石の城主となった。秀長の没後は子秀俊に仕えたが、秀俊も没し、一時高野山に入った。しかし、豊臣秀吉の懇命によりその直臣となり文禄四年（一五九五）伊予板島（宇和島）七万石、文禄・慶長の朝鮮出兵に水軍を率いて従軍。慶長の役では巨濟島の海戦で朝鮮水軍を全滅させたが、李舜臣が再び将となったため苦戦した。再出兵の際の功により伊予国で一万石加増。一方、高虎はすでに天正十五年徳川家康の伏見第築造を機として家康に接近、朝鮮出兵中も家康より手紙が寄せられ、慶長四年（一五九九）先んじて弟正高を江戸に人質に出すなど家康の信任篤く、同五年関ヶ原の戦に東軍左縦隊として小早川秀秋大谷吉継の軍を破り、この戦功で同年十二万石加増、伊予今治二十万石の大名となった。同十一年備中国で二万石加増、和泉守、同十三年伊賀一国と中部伊勢で二十二万九百五十石津城主に転封、この転封は大坂表非利の際は家康は上野城へ引取、秀忠は彦根城に入り防御の配慮（『高山公言行録』）であったといわれる。高虎は伏見・丹波亀山城などの築城に従事したが、同十六年大坂方に備えて上野・津城の大修築を行なった。上野の五層の天守は暴風により倒壊したが同十八年竣工、津・上野の城下町も整備した。

大坂夏の陣に河内路の先鋒となり、八尾で長宗我部盛親と苦闘し、真田幸村のため危険に瀕した家康を救うなど戦功を挙げ、元和元年（一六一五）伊勢国四郡のうちで五万石、さらに同三年多年の忠勤で伊勢田丸五万石増封され三十二万三千九百五十石、同五年徳川頼宣の和歌山転封に伴い、田丸領は大和・山城の内五万石と交換になった。また日光東照宮造営、徳川秀忠の女東福門院の入内などにも奔走し寛永三年（一六二六）少将となった。晩年失明し寛永七年十月五日没。七十五歳。高虎は家康・秀忠への忠勤と巧みな処世術により津藩祖として藩政の基礎を築いた。高虎時代の初期藩政の特色は年貢・夫役の確保のため定十三力条、家・人・馬改め、百姓家付帳の作成、百姓逃散・一揆防止のため十人組組織、平高実施、あるいは土着郷士懐柔のため伊賀出身の家臣保田采女に藤堂姓を与え、伊賀者と称せられた忍者を採用し、元和九年松平忠直の変に備えて農兵五十人を募り無足人と称する農兵隊組織の起源を作った。高虎は文学・茶の湯・能楽を嗜み、子の高次に与えた太祖遺訓十九条が知られる。藩祖高山公と称され、江戸上野の寒松院（東京都台東区上野動物園内）に葬る。法号寒松院殿道賢高山権大僧都。（戦国武将合戦辞典）

大洲城跡（大洲市大洲）→日本100名城（82番）

大洲城は、曲流する肱川の西岸にある標高二三メートルの小丘を中心に築造された平山城で、古くは地藏嶽城、亀ヶ岡城、大津城などと呼ばれた。

元弘年間（一三三一～三四）以来、宇都宮氏八代の拠点ののち、戸田・池田・藤堂・脇坂・加藤の諸氏が城主となった。現在に連なる近世城郭として大津城が建造、整備されたのは、藤堂・脇坂両氏が城主であった慶長年間（一五九六～一六一五）とみられている。「大洲之城」の名が出るのは、万治元年（一六五八）加藤泰興の文書が初見である。



元和三年（一六一七）、加藤貞泰が大津六万石（元和九年に新谷一万石分知）の領主として入部し、以後廃藩まで加藤氏一三代の居城となった。

城は丘陵の平坦部を本丸とし、下段を二の丸として、東に肱川、北に久米川、西と南は内堀をめぐらしている。その外側が三の丸で、周囲には外堀をめぐらす構造で、城郭の規模は東西二町五〇間（約三〇九㍎）、南北四町（約四三六㍎）といわれ、天守のほかは一八の櫓があった。

現在、城跡には本丸を中心とする石垣と四つの櫓、内堀の一部が遺構として残り、このうち本丸と二の丸の一部が史跡として指定されている。

国・重要文化財（建造物）

大洲城 三棟 附棟札二枚（昭和三一年六月一八日指定）

大洲盆地の中心を流れる肱川の左岸に接し、大洲市街地近くにある小高い丘陵を利用して築かれた平山城で慶長年間（一五九六～一六一五）に藤堂高虎・脇坂安治の両氏によって建築整備されたものといわれている。かつてこの城は、天守閣を始めとして二十余りの櫓からなっていたが、今は四櫓が残っているだけである。

高欄櫓は江戸末期万延元年（一八六〇）に再建されたもので、二重二階櫓、本瓦葺である。北側に渡櫓が接続して天守に通じていたもので、上層の屋根には唐破風がつけられ、擬宝珠のついた高欄が縁をめぐらしている。また西南隅に袴腰形石落しを付け、この建物

に威容を添えている。

台所櫓は安政六年（一八五九）に再建されたもので、二重二階櫓、本瓦葺である。もとは天守に渡櫓で接続され、一階は土間と板張り二重、二階は一室となっている。規模は高欄櫓よりやや大きく、入母屋造で、中央に花頭窓が設けられている。

苧綿櫓は天保一四年（一八四三）に築造されたもので、二の丸の南隅にあって独立した櫓である。二重二階櫓、本瓦葺で規模は小さい。外隅に袴腰形石落としをつけ、その一部は窓となっている。なお、この櫓には棟札二枚があわせて指定されている。

なお、これとは別に三の丸に南隅櫓（国指定重要文化財、加藤氏所有）と下台所（県指定有形文化財）が残っており、城跡は県の史跡に指定されている。

宇都宮豊綱

戦国時代から安土桃山時代にかけての武将。伊予国の戦国大名。伊予宇都宮氏最後の（8代目）当主。大洲城主。

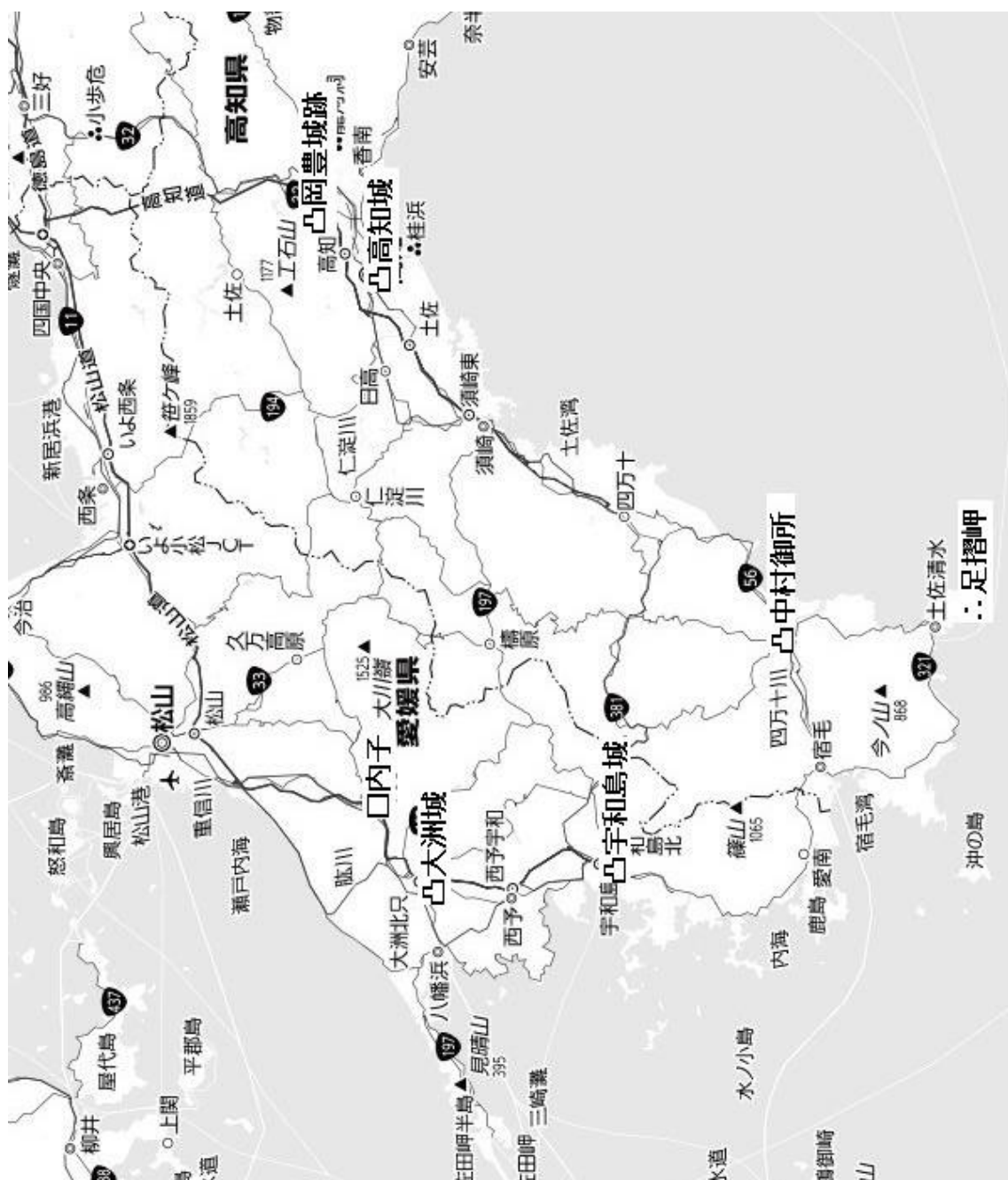
伊予宇都宮氏は宇都宮氏の分家の一つで、下野宇都宮氏と同族であり、伊予の喜多郡に勢力を築いた。当時の伊予国内では道後方面を支配する守護の河野氏、宇和郡の西園寺氏に挟まれる位置にあり、国外からも土佐国の一条氏、豊後国の大友氏、中国地方の大内氏、後に毛利氏といった諸勢力が伊予への大きな関わりを持っていた。

西園寺氏との戦いでは、西園寺実充の子・公高を討ち取る武勇を見せた。その後、姻戚関係にあった一条氏と結んで河野氏との対立を深めたが、永禄 11 年（1568 年）に毛利氏の援軍を受けた河野氏との鳥坂峠の合戦にて大敗を喫した。その後、毛利方に捕らえられ、天正 13 年（1585 年）に備後国で病没。位牌は清源寺に祀られている。

脇坂安治（一五五四―一六二六）

淡路国洲本城主、のち伊予国大洲城主。初名甚内。天文二十三年（一五五四）近江国浅井郡脇坂に生まれる。父は田村孫左衛門。母の再嫁に従い脇坂安明の嗣子となる。母は田村景治の妹で、はじめ景治の従弟孫左衛門に嫁し、安治出生ののち安明に再嫁したという。永禄十二年（一五六九）明智光秀に属し丹波国黒井城攻めに初陣。同年はじめて羽柴秀吉に謁見し、食禄三石を与えられた。のち姉川の戦や播磨国三木城・神吉城攻めなどに参陣し、天正十一年（一五八三）の賤ヶ岳の戦では、七本槍の一人として奮戦し、その功により山城国のうちに三千石を与えられた。翌十二年の小牧・長久手の戦には、伊賀国上野城に籠城した織田信雄の家臣滝川雄利父子を攻め落とし、同国の支配を命じられた。同十三年五月、摂津国能勢郡のうちに一万石を充行われた。同年七月従五位下中務少輔に叙任、八月封地を大和国高取城に移され（二万石）、さらに十月に淡路国洲本城主に転じ三万石を領した。同十八年小田原の陣には、九鬼嘉隆・加藤嘉明・長宗我部元親らとともに船手の大将として、伊豆国下田城を陥れた。文禄の役・慶長の役にも水軍を率いて渡海し、戦功により三千石加増。

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦には、はじめ西軍に従ったが、ひそかに徳川家康に通じ、小早川秀秋らとともに東軍に寝返った。戦後家康に拝謁し、近江国佐和山城の攻撃を命じられた。家康の大坂城入城後、西国船出入りの押さえとして、淀川口の警備にあたった。同十四年九月、洲本を転じて伊予国大洲城主となり、五万三千五百石に加増された。元和元年（一六一五）致仕、家督を安元に譲り、同三年京都の西洞院に閑居し、寛永三年（一六二六）八月六日、同地にて没した七十三歳。法名は臨松院殿前中書少卿平林安治大居士。墓所は京都市右京区花園妙心寺町の妙心寺隣華院。




備陽史探訪の会 事務局

〒720 - 0824 福山市多治米町5 - 19 - 8
 TEL&FAX 084 - 953 - 6157
 E-メール info@bingo-history.net
 公式ホームページ
<http://bingo-history.net>